

## 0 序章

昨年のクリスマスも間近という12月23日に、大向さんから一本のメールが届いた。「北海道と北東北の縄文遺跡群が世界遺産に登録される見通し。連携して特別局をやってみませんか。」という内容だった。添付ファイルには詳細の遺跡情報が掲載されていた。私は、縄文遺跡というと竪穴式住居に縄の模様がついた土器、そして、中空土偶。このくらいの知識しかなかった。資料をひも解いていくと、かつて津軽海峡をはさみながらも、縄文人たちは、交流を深めていた証拠が、あちらこちらにあることを知った。

「連携。」私はメールを見て、この二文字が思い浮かんだ。そうか、太古の昔から、住むところは海峡を隔てていたけれど、交流があり、時には、助け合ったりしていたんだ。現代の私たちにおいても、東北地方と北海道地方は、たくさんところで、つながりを持ちながら、生活を営んでいるということも同時に思った。

その一方、私は、まだ何の経験もない新米支部長である。北海道と北東北が連携しながら、特別局を開設するなどという事務仕事をする立場でもないし、力量もないことは、十分に理解していた。

「この話、どうしようか。」断るのは簡単である。「支部の仕事で精いっぱいなので。」で済む。でもそれでいいのか。自問した。でもすぐにその自問に対する答えはでた。「迷ったらGO」であり、「仕事は断らない。」という自分の信念を貫きたか

った。

すぐに、関連する胆振日高支部、石狩後志支部、そして北海道地方本部に相談した。そうしたら、「佐々木さんが中心になってやってくれるなら、応援するよ。」ということで、この事業は、北海道の調整役は私が担うということで、進められることになった。

もう一つ、私には小さな自信があった。それは、20年前に始まった津軽海峡コンテストの企画に私が携わったことである。支部をまたがって主催するコンテストはいままでどの支部にもなかった。青森県支部と渡島檜山支部は、毎年支部大会、前夜祭で交流しており、そんな中で、「お空でも交流したい。」という話から、海峡を挟んだコンテストの企画が生まれ、その中に私もおり、海峡を挟んだ支部同士は3点、同じ支部同士は2点、それ以外は1点という基本ルールを決まったのも、前夜祭の時の夜の席だったように記憶している。

## 1 大きな構想へ向けてのスタート

年が明け、大向さんとのメール、そして電話でのやりとりは、ほぼ毎日のように続いた。大向さんは、私も尊敬する位行動派である。青森県庁に何度も足を運び、今回の世界遺産登録にアマチュア無縁が積極的に応援することの許諾を取り、また関係の、青森県支部、岩手県支部、秋田県支部、そして東北地方本部との連携もとってくれた。

「いける。」私の不安は、自信へとつながっていった。

1月から3月は、公私の公の方も、何かと気ぜわしかった。というのも、私は3月で教員を定年退職となり、冠に「最後の」が付くことが多く、また、最後だからこそその仕事が回ってきたりしていた。さらに、厚沢部町は藩アワードの対象地ということで、リクエストが多く、オンエアするとパイルが続く生活であった。朝も出勤まで、SSBやCWでオンエアすることが多かった。下旬にはアンテナも降ろし、厚沢部町固定の免許も終わらせる手続きを取った。3月31日の夕刻、いつものように、「じゃあ、お先に。」と帰ろうとすると、残っていた全職員が見送ってくれた。「長い間お世話になりました。」大きく手を振って、校門を後にした。

4月に入り、北海道もすっかり春の陽気になってきた。17日に関係する正村北海道地方本部長、岡田石狩後志支部長、加藤胆振日高支部長、私、それと、オブザーバーで、大向さんが私の電話をつなぎっぱなしにし、参加し、アドバイスを得た。その結果、この特別局は、北海道地方本部としても正式な事業となった。ただ一つ原案と異なったのは、私の原案ではトップを北海道地方本部長であったのが、会議の中で、私に変更になったことだ。「はい、いいです。」と言いながらも、事務局とトップは、全く違う。安堵感の中に新たな緊張感を持ちながら会議を終えた。本格的スタートが決まった日だ。

開設までの期日が迫っているためにすぐに申請書類を北海道地方本部長経由

でJARLへ提出した。ひな形は、7の縄文局のがあったので、それと見本としながら、北海道総合通信局へ提出する書類を提出したのである。あとで、大きなミスが発覚することはこの時は全く気付かないままに。

5月に入り、北海道・北東北の縄文遺跡群もほぼ確実に世界遺産に登録されそうだという情報が入って来た。しかし、「ほぼ確実に」であり、「確実に」ではない。万が一、世界遺産登録にならなかった場合は、この話は全て消えてしまうのである。そんな懸念はごくごく小さく、特別局は、アワードの話に移って行った。特別局開設にアワードをやりたい。という声を聞き、大向さんと相談した。しかし、大向さんも私もアワードは詳しくない。北海道の支部長さんも、同じ。原々案として、8と7の縄文局は必須、これに加えて遺跡対象地の5か所を加えてB賞、そして全ての遺跡対象地14か所を加えてA賞という原案を立てた。とくに遺跡が多い青森県には、8か所の対象地がある。中にはほとんど固定局が運用していないと思われる町も。「A賞なんてできる人いないんじゃない。」という意見も多かったが、難しい課題を残しておくのも面白さの一つということで、アワードの条件は決まった。でもアワードそのものの運営経験がないので、私は、何回かメールなどで、交流のあった愛媛のアワードハンターズグループEAHGの越智さん(JH5GEN)に相談した。私の考えていた通りで、合格をもらい、いくつかのアドバイスをいただいた。紹介もして下さるということだった。

## 2 目的を明確にした企画書

6月に入り、私は北海道の縄文局の運用体制の原案を作るのにエネルギーを使っていた。私が企画書を書くときは、目的に時間をかける。何のために特別局をやるのかというところである。会議などでは、さらっと通過してしまい、多くの人がいまして気に留めない項目である。話はどうしても「どうやってやるの。」が中心になってしまう。でも、私は、「どうやってやるの。」で迷った時は常に、「何のため」に戻る。そうすると、おのずと答えが見えることがよくある。今回の目的は次の5つとした。

- (1)「北海道・北東北の縄文遺跡群」が世界遺産に認定されたことを祝し、それを全国、全世界へ発信していく機会とする。
  - (2) 登録される遺跡のある石狩・後志、胆振・日高及び渡島・檜山支部の各支部と、青森県支部、岩手県支部、秋田県支部の連携を深める機会とする。
  - (3) たくさんの局と交信することができる特別局を運用することによって、通信技術の向上を図る機会とする。
  - (4) ふだんあまりアマチュア無線に出ることの少ない方、短波帯に出る機会の少ない方に短波帯の面白さを知ってもらう機会とする。
  - (5) 公開運用を通して、広く一般市民にアマチュア無線をPRする機会とする。
- 私の中では、この特別局が広く三支部を回ることから、それぞれの地域で、オペレータの発掘をし、アマチュア無線を再発見してほしいということがある。また、屋外運用などで、アマチュア無線のことを

多くの市民・町民にPRしたいというの強い思いです。

また、(4)にも、こだわりがある。記念局は、多くの局にサービスする責務がある。オペレータが次々とパイルアップをスムーズにさばっていくのが理想なのかもしれない。けれども、この特別局の運用を通して、スキルアップしていくということも大切にしたい。その両側面をかなえていくために、慣れたオペレータが見本を見せつつ、指導助言しながら、スムーズな交信ができるよう育てていくことを大切にしたい。

その他、企画書には、事細かく、記入し、それぞれの支部での温度差が発生しないようにした。

## 3 QSL カード

そろそろ考えていかなければならないのがカード。特別局との交信の一つの楽しみはカードである。北海道と北東北が連携しているので、お揃いのカードにしたい。ただ、全く同じカードで、7か8に印をつけるようなのでは、芸がない。それぞれのコールサインをきちんと入れたい。

最初は、上記のような共通カードを作成していこうということだった。ところが会議の中で、少し変化を持たせようということで共通カードを5000枚ずつ、そして、残りの5000枚は北海道と東北でそれぞれオリジナルのものを作っていくというように軌道修正がされた。

この時点で私の腹は決まっていた。「娘の妙美(たえみ)に頼もう。」と。私には、男の子一人、女の子二人の三人の子どもがいて、それぞれ独立して、家庭

を持っている。家に一緒にいた時は、あんまりいい父親をやることができていなかったと反省している。ほとんど仕事、仕事、無線、無線と言って、子育ては、母親任せであった。

でも、唯一、三人いる子ども、みんなパソコンに強いというところだけは、私の影響かなと思っている。特に娘たちには、マウスとタブレットを保育所の時から使わせて、イラストなどを描いていた。娘二人ともイラストなどが得意であり、一番下の娘は専門学校を出て、時折デザイナーとして活躍している。

娘たちに話すと、下の娘が、すぐに引き受けてくれた。「運営委員会では2種類考えているんだ。そのうちの一種類をお願いしたいんだ。よかったら、二種類ぐらい作ってもらって、どっちかを運営員さんたちに選んでもらおうと思うけど、手数がかかるけど、お願いしていい？」

たった数日で原案が私のもとにメールで送られてきた。手前味噌ではあるが、私が頭をひねって作るよりやっぱりセンスがすばらしい。早速、大向さんに話を通したら、「二種類ともどっちも使おう。」という意見だった。他の運営委員さんもいるので、東北、北海道でそれぞれ話し合ったが、結論は動かなかった。縄文特別局のカードは二種類とも、娘のデザインということに正式決定した。親としては嬉

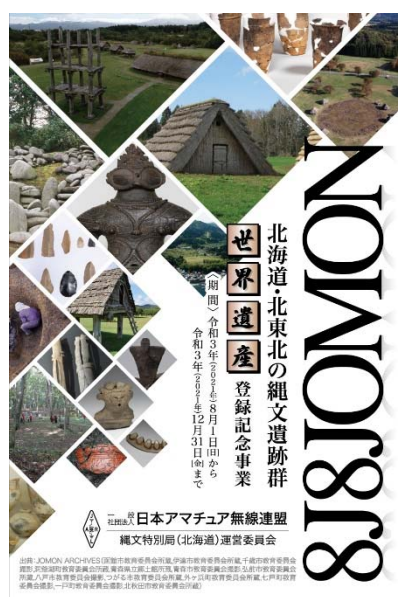
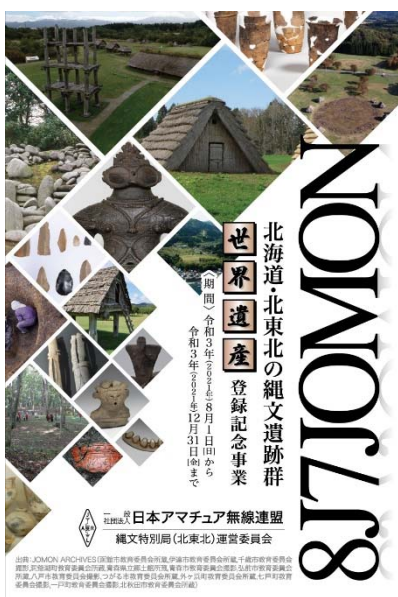
しかった。

#### 4 運用期間が短縮？

7月に入り、JARL から、一本の電話が入った。「北東北の運用期間は、8月1日から12月 31 日までなのに対して、北海道は8月 1 日から翌年の3月末までとなっています。このへん変更がかかる可能性があります。」

これは私の代失敗であった。北海道の特別局の書類は1、東北の提出書類をもとい足並みをそろえて提出したが、なぜか3月31日にして出してしまったのである。

何をしたか。それは「外部に、このちぐはぐな情報が出てしまったか。」見事JARL NEWS の理事会報告に3月31日と明示されていた。しかたがない。大向さんに謝りつつ、この日程を通すことになった。その時点では、更に大波が来ることは知らずに。





なことだと感じるようになってきた。

## 5 全国の理事にPR

この日、全国の社員の皆さんに一齐に縄文特別局の概要やパンフレット、申請先などを一齐送信した。すると、多くの支部長さんや本部長さん、そして、社員さんたちから、「うちのホームページに載せたよ。」「メーリングリストで伝えたよ。」などのたくさんの励ましをもらった。いわゆるJARLの顔の皆さんにPRしてもらったのはとても心強かった。あとから変わる運用期間については、後日もう一度メールを出す羽目にはなってしまったが。

## 6 ラジオでもPR

ラジオでも高尾会長に紹介していただきました。

7月25日には、JARL RADIO.COMで、高尾会長と広報大使の水田さんから、今回の縄文特別局についてPRしてもらった。前回の非常通信に続いて、今回も私の出した手紙を放送に採用してもらって、嬉しかった。

この支部長という仕事をするようになってから、PRということを大切にするようになったと思う。待っているのではなく、攻めていく、伝えていく、こういうことも、アマチュア無線が繁栄するには、とても大切

## 7 開局式で縄文局同士の交信を目指す

北海道の縄文特別局は、遺跡の存在する3つの支部を巡回する。石狩・後志、胆振日高、そして渡島・檜山である。8月1日から3月31日までの243日間をあまり日数に偏りがないように回さなければならない。さらに各支部の事業が含まれる日を探った。縄文特別局の公開運用などができれば、より事業効果が上がると考えたわけである。

そうすると、8月に支部コンテストがある胆振・日高支部から回すのが効率的である。次いで、支部コンテストや支部大会、蔦屋イベントがある渡島・檜山支部、そして支部大会、製作会などのある石狩・後志支部へと回していくプランを立て、三つの支部を二巡する原案とした。

そのころ大向さんから連絡があり、北東北は、青森市内の三内丸山遺跡に特別局を構え、北海道の特別局と交信したいとのことであった。開局式での8J7JOMONと8J8JOMON。これは、いまだかつてない空の大イベントである。私もこれは何としても成功考させなければならぬと思った。大向さんの頭の中では、

青森と函館での2mでの交信ということのようだったが、「開局式は伊達で行います。」と伝えると、「さてどうやって交信を成立させるか。」頭を悩ませてしまうことになった。2mは、横津の山で電波が遮られるようである。また、レピータも試したが、伊達からは、八甲田山のレピータを開くことができず、7メガにかけてみるかということになった。

## 8 やはり運用期間が短縮

また、JARLから電話がかかって来た。「総合通信局からの指導で、特別局の開局期間が長いので12月末でとなります。」「わかりました。」こうなることは一応覚悟はしておいたので、ポスターの修正、縄文局のPRをした方には訂正、CQ出版ど外部へも訂正を流した。アワードの規約もそれに合わせて訂正した。また、北海道内のローテーションも二巡から、一巡目を若干調整しての一巡とした。胆振日高支部のみ最初と最後の2回のローテーションとした。

後半が短くなるということで、実質スタートには、影響がほとんどない。粛々と訂正の手続きを行った。

大丈夫とは思っていたが、ニュースを見て胸をなでおろす

99%なのか99.9%なのかかわからないが、100%でない不安は残る。パンフレットにも、「世界遺産に登録された場合。」という但し書きをいれて、配布したところもある。

開局式を数日後に控えた7月27日、正式に世界遺産登録の知らせを聞き、大丈夫だと思っていたもののやっぱり安堵

した。

そして翌日の28日は、JARLから、免許状関係の全ての書類がPDFで届き、その翌日29日にゆうパックで、8J8JOMONの免許状が届いた。私の家が、常置場所になっているのは、今までなかったような不思議な気分だった。

「この免許状を8月1日に確実に伊達の開局式に届けなければならない。」書類は、私のリグの前に大切に置いて、その時を待った。

## 9 全国へPR

開局式を翌日に控えた7月31日、私は縄文特別局の開局を全国にPRした。メールを出した相手は私と交信記録のある全国の皆さん。自分で言うのもおかしいかもしれないが、私のアクティビティは高い方だと思う。カードで言えば、ここ数年来るカードは、段ボール箱で届く、年間1万局弱位のペースである。いっちょまえのアンテナと、これもいっちょまえのパワーを出して、98%ぐらいはゆったりと国内QSO。「もったいない。」とよく言われるが、やっぱり全国のみなさんと、ゆったりとお話をしているのが私の一番の楽しみである。

1月から7月までの交信局から重複局を除き、jarl.comで届かない局を抜いていくと、2000局ぐらいへの発信となる。だいたいこのようなダイレクトメール的なものは返信が返ってこないが普通と思われる。しかし、今回の場合は、結構、質問が来たり、応援が来たりと、多くの方に好意的に知らせることができた。百通以上のメールをいただいたが、全て、返信をし

た。これもPRだが、後から、加熱する縄文アワードにつながったとすればこれも効果ありだったのかと思う。

## 10 開局式

私は、毎朝ラジオ体操をやっている。3月末で退職して、4月1日から近くの公園で始めた。最初は妻と二人であった。しばらくして一人増えたが、まだ寂しい。近所にちょっとしたビラを蒔いて、ぐっと人数が増えた。現在十名ちょっとした毎朝の仲間と共に一日がスタートする。その日も6時半から10分間体操をし、妻と伊達に向かった。

10時前には、伊達市の北黄金貝塚公園についた。2年ぐらい前に、一度訪れたことはあったがこのような形で再び訪れるとは、縁って不思議だなあと思った。

いつもメールでやりとりしている加藤支部長さんと会った。やはり立派だった。伊達アマチュア無線クラブや胆振日高支部の各地から、この日のために多くの方が駆けつけてくれていた。また、次々と来る報道機関にも驚いてしまった。

VHFのアンテナ、そしてHFのバンザイダイポールがほどなく上がった。横断幕も張られ、場の雰囲気は盛り上がりを見せていた。早速、私は大事に携えてきた縄文特別局の無線局免許状を加藤支部長に手渡しした。拍手が起こった。運用開始である。伊達アマチュア無線クラブのJ18ACV形本さんの第一声で、年末までの運用の始まりとなった。やはり呼ばれる、呼ばれる。札幌から、岡田支部長さんもお子さん連れで到着。加藤支部長も入れて無線機の前で、無線談義となる。

11時を回り、交信局数は増えていった。そして、北海道や東北からも声がかかっている。「このままのコンディションで昼まで持ってほしい。」このことを空に、向かって念じていた。

程よい余裕を持った中で、開局式は始まった。私の挨拶は、以下の通り。



青森・三内丸山の特別局と記念交信する  
佐々木朗・特別局運営委員長ら

2021/08/02 北海道新聞

北海道・北東北の縄文遺跡群の世界遺産登録、そして、関係者の皆様のご努力をいただき、縄文特別局の開局、そして運用開始を宣言できる日を迎え、皆様に心よりお礼を申し上げます。

この特別局開設の記録をたどってみると、本日三内丸山遺跡で指揮を執っていらっしゃる大向さんからの昨年末の一本のメールがスタートでした。メールや電話で夢を語り、そして、関係支部の方とも相談し、この日を迎えることができました。私自身、このようなところに立つ器ではありませんが、とても嬉しく思っております。

私は、企画書を書く時に、一番大切に

しているのは、「何のため」という目的の部分です。今回は、5つの柱を建てました。①世界遺産を祝福すること、②関係支部との連携を深める機会とすること、③通信技術の向上を図ること、④アマチュア無線から遠ざかっている人が戻ってくる機会としたいこと。⑤アマチュア無線のPRを行う、ということです。

今日の開局式は、この全てが網羅されているように思います。この縄文特別局の開設により、関係画支部の、そして全国のアマチュア無線がより活発になることを心より願っております。

大向さんとの一本のメールから、今回の事業を起こすことができました。新しいことを始めるのは大きなエネルギーを必要としますが、私たち関係者は、常に「現状維持は後退」との認識で、常に創意と工夫を大切に、これからもアマチュア無線の振興発展に寄与して参りたいと思います。

本日は、縄文特別局の開局おめでとうございます。そして、ただいまからの8J8JOMONの運用開始を宣言いたします。

令和3年8月1日

北海道・北東北縄文特別局運営委員会  
委員長 佐々木 朗

一般的なセレモニーの後、いよいよ世紀の縄文局同士のQSOが待っていた。

7. 048MHzで8J7JOMONが次々と交信している。「こちらは8J8JOMON。」とってもらえない。二度目、三度目も他のコールが呼ばれる。よしもう一度「こちらは8J8JOMON」

「8J8JOMON、こちらは、8J7JOMON。佐々木さん、こんにちは。59です。」オ

To Radio  
8J8JOMON

貴局運用場所：北海道伊達市

Confirming Our QSO

DATE			TIME	RS	BAND	MODE
Year	Month	Day	JST		MHz	2Way
2021	Aug.	1	12:22	59	7	SSB

「北海道・北東北の縄文遺跡群」  
世界遺産登録記念JARL特別局

**8J7JOMON / 7**

運用場所 青森県青森市  
JCC:0201 GL:QN00IT

運用者 JH7OYV

 北海道、青森県、岩手県、秋田県の合計17遺跡で構成する「北海道・北東北の縄文遺跡群」が2021年7月にユネスコの世界文化遺産に登録されました。農耕が始まる前、採集や漁労、狩猟が暮らしの基盤の時代に集落を形成し、1万年以上も定住していたことが明らかになりました。これは従来の定説を覆す研究成果でした。また、出土品からは遠く離れた地域との交易と、祖先や自然を敬う精神文化がうかがえます。遺跡を訪ね、縄文の世界にふれてみませんか。

一般社団法人 日本アマチュア無線連盟  
縄文特別局(北東北)運営委員会

### 開局式での交信のQSカード

ペレータの柳川さんからコールバックがあった。その瞬間は、ガッツポーズをしていた。それは、後からテレビで映っている自分の姿を見て、わかった。夢にまで見た、7と8の縄文局の交信。一生心に残る交信になると思う。

後から大向さんが、右のようにカードを送って下さった。私にもらう権限があるのかは、わからないが、いただくことにして、私の宝物の一つとしたい。

その後、新聞のインタビューを受けたり、テレビカメラに向かって、コメントをしたりするなど、現実と遠い隔たりを持つような時間を過ごし、1時過ぎに現地を引き上げた。

全体指揮に当たった加藤支部長、伊達クラブのみなさん、そして胆振日高支部役員の皆さんには、企画、設営、準備に携わっていただき、心より感謝したい。



## 11 形本さんとの電話でのおしゃべり

伊達の縄文局は、全てJ18ACV形本(かたもと)さんが担っているという。開局一週間は、とにかくたいへんであったと思う。夜になるとよく形本さんから電話がかかって来た。「今日何局やって、こんな人がいて・・・」一日に100局近くもやった日もあったようで、頭が下がる。また、北海道地方本部の申し合わせで「ポータブルエイト」は付けないということであったが、そのことのご意見もかなりあったという。なかなか理解していただけなかった方には、私の方からも連絡して、とりあえずわかっていたいただいた。理解はしても納得までは、というレベルであろうが。

それにしても1000局近く交信したという報告を聞いて、心よりお疲れ様でしたと申し上げたい。しばらくは、個人局の運用でも「エイトジェイ・・・」って言うのではないかと心配する。たぶん無線大好きな形本さん。きっと次の日から個人コールで思い切りやっているに違いないと思う。

## 12 アワード

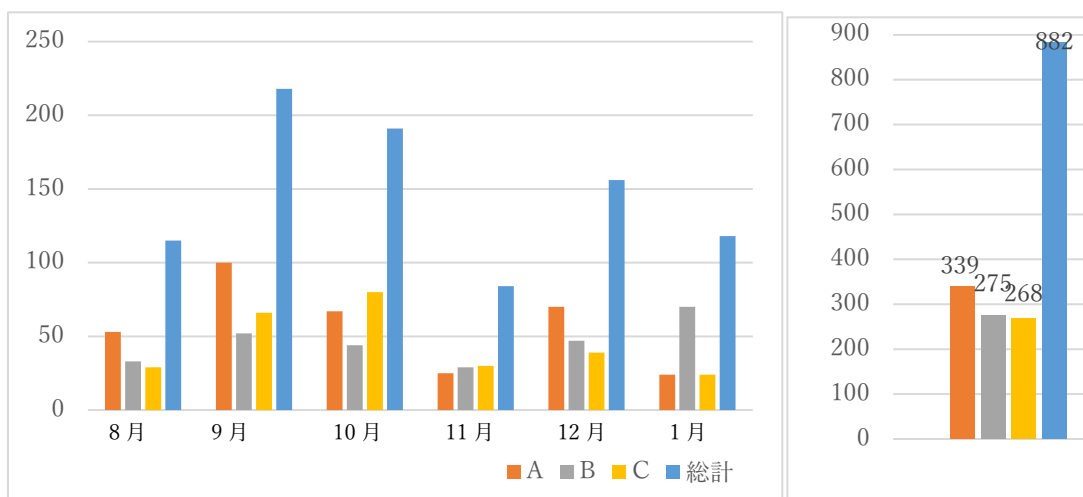
北海道と北東北で同時に特別局が開

設されるということで、それに関わって、アワードを発行しようという話が出た。私は、書いた通り、ほとんどアワードはやらない。別にやらない主義ではないが、ただ、全国の皆さんと、アマチュア無線について語り合っていればそれで幸せというのである。そんな私が、アワードマネージャーを引き受けることになった。

やったことはない、追いかけたこともない、ましてアワードを作ったり、申請を受けたり、発行したりなど、全て初めての経験となる。

もちろん、アワード発行がどんなものであるかは、ある程度の下調べはした。その上で、私がいままで経験した数々事務局のノウハウを生かして、申請しやすく、また、発行しやすいもの考えた。

それと私が大切にしたいのは、目的を明確にしていくこと。つまり、今回の北東北、北海道の縄文遺跡群世界遺産登録を祝するものでありということである。それを根底にルールを検討した。まずは、8J7JOMONと8J8JOMONの2つの特別局との交信でもらえる賞を基本の賞、C賞とした。それに加えて、縄文遺跡群が発掘された北東北、北海道合わせて1





私はB賞をいただきました。

5の市町を集めることを考えた。ただ、15の市町にアクティブなアマチュア局がすべているとは限らないので、多少の不安があったが、それでいくことにした。縄文特別局に合わせて、遺跡群のある5市町と交信すればB賞として、途中のステップとした。A賞は、特別局に合わせて、15全ての市町との交信とした。相当困難なルールで申請あるかどうかと思いながらも、それが受付開始から、数日でその心配が全く持って吹っ飛んでしまったのは驚きである。

申請も、できるだけ敷居を低くし、多くの人が気軽に申請できることを考えた。そのため、WEB上で申請し、アワードをPDFにして送る方法を考えてみた。そして、無料とした。それと並行して、通常のアワードのように紙での申請も受け付けた。こちらは、郵送料と若干の手数料を入れて300円をいただくことにした。

こうして8月1日に運用が始まった。最初の申請は翌2日、そして、4日にはA

賞の申請を受けた。ログを見ても確かに交信している。あまりの早さに驚いた。次のグラフが月ごと及びトータルの申請状況である。一番難しいと思われたA賞の申請

が多くなっている。最後の1月がA賞に届かず、B賞の申請とったことが予想される。

毎日のように申請が来る申請書。多い時は一日に10通を超えることもあった。できるだけ事務処理を早めたいとの思いで、原則アワードは即日発行とした。メールでの申請が多く、届かないことも予想されることから、PDFでアワードが届いたら、返信メールをもらうようにして、ミスをなくすようにした。

1月末日の締め切りまで、総計881のアワードを発行した(同じ局への複数発

0エリア	50
1エリア	299
2エリア	102
3エリア	78
4エリア	32
5エリア	25
6エリア	57
7エリア	122
8エリア	92
9エリア	24
	881

行もカウント)。

右にエリアごとの申請数を記す。全エリアから申請をいただいたのも嬉しかったし、7エリア、8エリアからの申請が多かったのも、地元で根付いたアワードであることが証明されたようで、安心した。

アワードがこれだけの数を発行できたということは、申請下さった皆さんの熱意は、もちろんではあるが、縄文対象地を移動して下さった皆さんの行動力に寄与するところが大きいことは間違いない。申請書を見ても、お馴染みの移動局があらこちらの対象地を日替わりのように移動して下さっていることがわかる。彼らの行動なしには今回のアワードが成り立たなかったと言えるくらい貴重な存在であった。

また、特別局を運用して下さった皆さん、そして管理者の皆さんのご高配も大きい。計画的に運用場所を選定していくことはもちろんのこと、終盤には、オンエア数の少なかった対象地からのオンエアを臨機応変に考えるなど管理者の采配も大きかった。また、特に7エリアにおいては、当初運用予定をはるかに上回る交信数に達し、2度のカードの追加注文も行った。

後程示すが、コメント欄からも、アワードに対する情熱、関係者への感謝の気持ちがたくさん綴られていた。機会を見つけてみなさんにも紹介していきたい。

### 13 QSLの印刷

コールサイン面は、北東北と北海道で事前に2種類の共通デザインでカードを作成したが、データ面については、運用

が始まってからの準備となった。カードに特別局の意義をいかに記載するかもだいぶ時間をかけた。あまり文量を増やしても行けないし、難しい言葉を並べてもいけない。さらりと、読めるような文を何度も推敲し、関係者に見てもらいながら最終決定した。また、ロゴマークも、函館市教育委員会の担当者と連携を取りながら、承諾を得ることができた。最後にJARLの許可をいただき、フォーマットの完成となった。

北海道は5QSOの様式を作った。一枚のカードに5つの交信まで、並べて記載するというものである。多くの方が、移動地、周波数、運用モードが違くとコールいただくので、複数交信の方が多という現状を見て判断した。現実、一回の交信より複数交信している方の方が多く、限られた予算では、効率的な発送ができたと思う。

カードは、それぞれの支部の運用が終わった時点で、私の作った定義ファイルにより支部ごとに発行した。

### 14 特別局のみA賞の要望と一泊運用旅行

「15対象地を全部特別局でそろえる。」計画の段階で考えもしなかった申請が後半いくつか私の元に届いた。A賞を超えてS賞としたいところであり、申請者の方からも特記のような記載ができないかという照会もあった。しかし、「突起はしない。」という原則を通させていただいた。もちろん、メールには、その旨、「ありがとうございます。」の労苦をたたえる言葉を入れさせていただいた。

特別局のみのA賞の申請と時期を近くして、特別局に運用してほしい市町のリクエストなども届いた。東北エリアでは、当初の計画を見直し、短期間で、対象地をさらに一回りするなどの配慮を行った。北海道においても、交信数が比較的少なかった洞爺湖町を中心にラストスパートを兼ねて、運用を行うことを決めた。

## 15 伊達市洞爺湖町での移動運用

特にCWでの運用希望者が多かったことから、私が、12月11日、12日の週末に伊達市及び洞爺湖町へ出向いての運用をすることになった。



洞爺湖町道の駅での運用、向こう側、形本さん JI8ACV、手前筆者

11日は、加藤胆振日高支部長に伊達紋別駅まで迎えに来ていただき、加藤さんの仕事の事務所から運用。加藤支部長と夕食を共にして、アマチュア無線のことを語り合った。ゆっくり温泉につかりながら、一泊。翌12日には洞爺湖町道の駅からの運用となった。最後にはまた、駅まで送ってもらい、二日間の運用を終了した。両日も、加藤支部長を始め、伊達市アマチュア無線クラブの皆さんがアンテナ設営に協力してくださった。もちろん、

パイルアップは、終日に近い位続いたが、できるだけ多くの交信を目的としていたので、昼食の少しの時間を除き、パドルを一日中操っていたという二日間であった。

この二日間の運用後に、アワード申請数が跳ね上がったのは、移動運用の成果でもあり、多くのコメントもいただいた。疲れも吹き飛ばす思い出に残る移動運用であった。

## 16 最後に

特別局の申請手続きから、北東北、北海道との異なる地方本部、支部でも連携、QSLの作製、アワードの発行管理、運営の采配。特別局に関わる全てに関わることができ、これまでできなかったたくさんの経験を積むことができた。これも最初に記した大向さんからの一通のメールと、たくさんの励ましであった。大向さんには、私の師として心より感謝申し上げたい。

また、全体の責任者として、たくさんのご要望やクレームもいただくことになった。要望としては、移動運用の要望が多かったが、FT-8による移動地のアナウンスについても多かった。また、ポータブルを付ける、付けないもあった。

また、運用のしかたについても、いくつか意見をいただいた。今回の特別局はJARLの局であり、私達は常にJARLの看板を背負って運用を行っているわけである。電波法から逸脱した運用は厳に慎まなければならない。正しい呼出、応答の方法、わかりやすく呼んでいただいたことへ感謝する交信を心がけたい。また、

特別局の運用については、その局に割り当てられている無線機を使うことなども機会あるごとに関係者の皆さんには、お話してきた。今後も JARL の特別局は、常に皆さんの見本となるような交信を示していくことが大切であり、アマチュア無線を始めて日の浅い方も、このような特別局運用の機会を積極的に利用し、先輩から正しく、スマートな運用方法を学ぶ機会としていただきたいと思う。

縄文特別局を、何とか無事終えること

ができたという満足感と同時に心の中では「次はどんな仕掛けを考えようかな。」と思っている私がいる。日々の交信も楽しいものではあるが、時々、自分自身に刺激を与え、また、アマチュア無線を愛好する皆さんへも、新たな目標を持っていただき、この素晴らしいアマチュア無線の世界をより深く、より楽しいものにしていけるよう、これからも努力を続けていきたい。

令和4年9月23日